

# 青森県立郷土館だより

News from the Aomori Prefectural Museum

通巻141号 平成19年(2007)8月1日 Vol.38 No.2

## よみがえれ北前船

8月15日(水)～9月17日(月)

「北国の海運と船」展

記念講演会8月26日・9月9日

【主催】青森県立郷土館 東奥日報社  
みちのく北方漁船博物館  
NPO法人あおもりみなとクラブ

【料金】一般 310円  
高校・大学生 150円  
小・中学生 無料



北前船は、江戸時代後期から明治時代にかけて、日本海交易で活躍しました。大坂や瀬戸内海方面でさまざまな物資を買いこみ、それを販売しながら蝦夷地に向かいました。蝦夷地では魚粕(うおかす)やアワビ・コンブなどを仕入れ、上方に運びました。

北前船は、代表的な木造和船「弁才船」(べさいせん)の仲間です。水押(みよし)と呼ばれる船首、船体中央の高い帆柱、大きな一枚帆、可動式の舵(かじ)などが特徴です。同じ弁才船でも菱垣廻船や樽廻船はスピード重視ですが、北前船は、積載量を大きくするため、ずんぐりした形

をしています。また、税金対策のため船首と船尾が大きく反り上がっています。

平成17年(2005)、みちのく北方漁船博物館財団が北前船を復元し、「みちのく丸」と命名しました。全長32m、全幅8.5m、帆柱までの高さ28mの、堂々たる「千石船」です。本展ではその建造過程や構造を紹介しながら、北前船の特徴をつかめるよう、立体的な展示を行います。また、陶器・漆器・笏谷石(しゃくだにいし)などの積載品や、深浦町円覚寺(えんかくじ)の「叶丸難船図絵馬」など、貴重な海上信仰資料(国有形民俗文化財)を紹介します。



## 土曜セミナー

# 青森県の百貨店

(平成19年5月5日／当館小ホール)

研究主査 佐藤 良宣

世界の百貨店の始まりは、19世紀中頃パリで創業したボン・マルシェであると言われている。正札(しょうふだ)通りの価格で陳列販売を行う、大規模で近代的な小売業の草分けであった。日本に百貨店を導入したのは、三越(みつこし)である。昔ながらの座売りをしていた同店は、明治28年(1895)に商品陳列場を設け、次いで明治37年12月、株式会社三越呉服店に改組したとき「デパートメント・ストア宣言」を行った。その後、取扱品目を増やし、大正3年(1914)に鉄筋コンクリート5階建ての本店を建設し、近代的デパートとしての設備を完成させた。

青森県では、大正10年12月に松木屋呉服店(青森市)が、大正12年2月にかくは宮川呉服店(弘前市)が、それぞれデパートを開店した。かくはデパートは、店舗面積が広く、鉄筋コンクリート3階建てでエレベーターを持ち、百貨店にふさわしい設備を整えていた。

昭和10年(1935)年10月1日、青森市に菊屋百貨店が開店した。菊屋は、生花や茶道の講習に利用できる数寄屋造りの和室を持ち、演奏会・展覧会等に利用できる500人収容のホールを持ち、文化的な催しの場所となることを意識した作りになっていた。戦前の東奥美術展では、青森市公会堂とともに、会場に利用されていた。



復元模型「かくは宮川」(昭和39年夏頃)

その後、戦中・戦後の苦難の時代を経て、百貨店は経済の復興とともに隆盛を迎える。特に昭和39年、五所川原市に中三(なかさん)百貨店が開店して以来、約10年にわたり県内各地で百貨店の開店が相次ぎ、県内旧三市だけではなく、五所川原市・十和田市・むつ市でも開店されるようになった。

近年、百貨店は郊外型の大型店との苦しい競争にさらされている。平成15年(2004)に青森市で松木屋が、平成17年に五所川原市で中三が閉店したのは、記憶に新しいところである。

## 化粧する地蔵たち



つがる市出野里／平成17年撮影

津軽地方の各ムラには、無数の地蔵サマが立つ。亡くした幼子の供養のため、近くの石屋に造らせた石や木の地蔵サマたちは、着飾り、化粧をしている。いまでも西津軽郡の地蔵サマたちは、思い思いに華やかな装いをしている。

たまたま、ムラのご婦人方が、地蔵に化粧をする現場に遭遇した。私は化粧したことがない。実

## この一枚

体験の無さは、ピント外れの質問となるものだ。

「この白粉はどこで手に入れるのですか？」

「化粧はみなさんと同じ方法ですか？」

お婆さま方は答えてくれた。

「昔の白粉は売ってネエベなあ。」

「だいたい、ワは、こしたに(※1)厚化粧でねえジャ! こしたのは、嫁入りのときだベナア」

ご婦人方は、我が子のように地蔵を抱き、白チョークとマジックペンと指で、先人達が施した跡をなぞるように、化粧直しをしていた。

※1=これほど。

(小山隆秀)

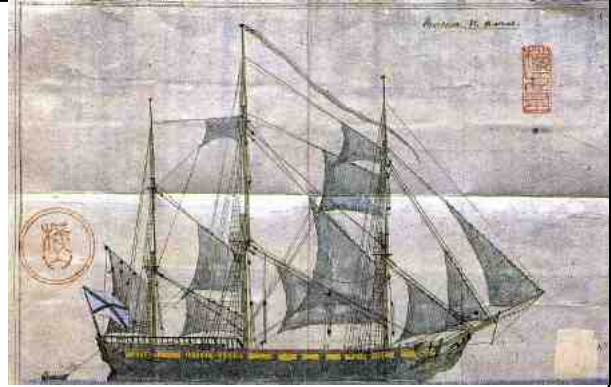
写真1は、ロシア人が持っていた原図を写したものである。描かれているのは「ディアナ号」。文化8年(1811)5月にクナシリ島で起きた「ゴロウニン事件」の主役となった帆船である。

事件の骨子は、ロシア人捕虜8名と高田屋嘉兵衛との交換・解放である。交換要員として捕えられたのだから、嘉兵衛にとってはとぼっちりだが、相当に胆力のある人物だったようで、ディアナ号の乗組員にも好かれた。嘉兵衛と彼らとの交流を描いた司馬遼太郎『菜の花の沖』では、別れ際、乗組員が嘉兵衛に「タイショウ、ウラア」と呼びかける感動的な場面が用意されている。

北前船「観世丸」の船主として日本海交易に従事した嘉兵衛は、津軽・松前と関係が深い。嘉兵衛の弟金兵衛は、深浦町の円覚寺(えんかくじ)に兄の無事を願う祈祷の依頼をしており、文化10年9月に解放された嘉兵衛も、感謝の意を込め、ロシア製シャンデリアなどを円覚寺に奉納した。

嘉永6年(1853)に長崎へ来たプチャーチンの船も「ディアナ号」だが、こちらはフリゲート型で、全く別の船だ。本図のディアナ号はスループ型砲艦の一つで、三本マストの「シップ・スループ」と呼ばれるタイプである。

警備のため蝦夷地に派遣された弘前藩士横山武薫(たけしげ)は、軍学上の関心から多くの



▲写真1 ディアナ号(初代) ▼写真2 打ち払われるディアナ号



見聞を書き留めた。中にはディアナ号がクナシリ島で盛岡藩兵に打ち払われる様子を描いた図や(写真2)、ディアナ号の副艦長エリコルト(リコルト)の図、また、かつて大黒屋光太夫を送還して来たアダム・ラクスマンが乗るエカテリーナ二世号の図もある。(本田 伸)

## 郷土の先人②

学校体育と音楽の先駆者

## 石橋蔵五郎 (いしばしぞうごろう)

1875(明治8)~1964(昭和39) 八戸市出身

明治8年(1875)、蔵五郎は八戸町(現八戸市)に生まれました。16歳で教師になり、小学校の教壇に立ちましたが、その2年後には上京し、体育、音楽(洋楽)、英語を学びます。当時としては新しい教育分野で、より専門的な知識と技術の習得に努力を惜しみませんでした。教師としての優れた資質に磨きをかけ、特に体育と音楽を通じ、豊かな人間性を育てる教育を実践していきます。

当時の女性に対する教育は、良き家庭人となるための良妻賢母主義という考え方が中心でしたが、そんな中で蔵五郎は、生まれ持った才能を生かし、個人としての「自覚」ある女性を育てるという教育目標を掲げて、新しい学校を創ります。明治37年(1904)、上野女学校(現在の上野学園大学:東京都台東区上野)を設立、その建学の精神は教育界に新風を吹き込みました。

大正12年(1923)、関東大震災で学園は壊滅的な被害を受けましたが、蔵五郎は私財を投じて再建、その後も幾度かの不運に見舞われましたが、持ち前の不屈の精神を発揮して学園とともに歩みました。

音楽や体育に関する研究、著作も多く、音楽と体育(体操)を結び付けたリズム体操もはじめ、その普及に努めました。また、自身の母校である八戸市立小中野小学校など県内の学校の校歌も作曲しており、蔵五郎の教育にかける思い、郷土への思いは今も歌い継がれています。(太田原慶子)



## 8月～11月の行事予定

### ○特別展・企画展

7月28日(土)～8月7日(火)

「八甲田山～県人作家57名による」

8月15日(水)～9月17日(日)

「よみがえれ北前船～北国の海運と船」

9月22日(土)～10月21日(日)

「花の肖像画～青森県の植物画」

10月27日(土)～11月25日(日)

「放浪の天才画家 山下清」

### ○記念講演会＝「よみがえれ北前船」関連

8月26日(日)桜井冬樹「西浜の海運と北前船」

9月9日(日)昆 政明「北前船の構造と航海」

### ○催し物

9月30日(日) 秋の自然観察会

### ○土曜セミナー(8月～11月)

8/4 民俗学における盆行事の基礎・基本

佐々木慶紀

8/11 ケガズと借金～借用証文にみる庶民の姿

桜井 冬樹

8/18 生誕100年 淡谷のり子

太田原慶子

8/25 版画のあれこれ(1)～木版画について

對馬恵美子

9/1 北前船入門

昆 政明

9/8 津軽郷土刀・八戸南部郷土刀

富岡 昭

9/22 オオバコの植物学

木村 啓

9/29 岩木山と八甲田のサクラソウ

葛谷 孝

10/13 漁労と食生活の移り変わり(4)

日下部元慰智

10/27 こわいハチ・こわくないハチ

山田 雅輝※

11/10 子どもの誕生と育成の儀礼

長谷川方子※

11/17 平安時代中期の人々の生活

成田 誠治※

11/24 畜産誌～広沢安任『奥隅馬誌』ほか

小熊 健 ※

※青森市福祉増進センター「しあわせプラザ」研修室

## 企画展 花の肖像画～青森県の植物画～



ニッコウキスゲ

ユリ科の多年草。つがる市のベンセ湿原は群生地として知られている。新岡美樹子画(青森市在住)

**豊**かな四季に恵まれた日本人は古くから、身近にある植物を食料として、薬草として、あるいは資材として、巧みに生活に取り入れ、そしてその姿を絵や図案などに描き、こよなくいとoshんで来ました。近年、カルチャースクールなどで開かれる植物画の描き方講座に受講者が殺到し、植物画を中心とした大人

の塗り絵も流行するなど、園芸ブームが続いています。これはおそらく、奇抜さや難解さがなく、かつ絵画としても美しい植物画が、自然と接すると同様に、心を癒し安らぎを与えてくれる事から、多くの人達に好まれている為ではないでしょうか。

本展では、明治以降から現在までの青森県出身の画家や研究者が、花(植物)をモデルにして描いた作品を紹介し、その魅力を多くの人達に伝えます。

1日本画家たちの植物画 2洋画家たちの植物画

3版画家たちの植物画 4研究者たちの植物画

5若手作家・新岡美樹子氏の植物画

【主要作家】橋本雪蕉、平尾魯仙、今純三、橋本花、鷹山宇一、棟方志功、加藤武夫、根市良三、佐藤薔、佐藤雨山ほか

【会期】9月22日(土)～10月12日(日)

## 企画展 放浪の天才画家 山下清



「長岡の花火」昭和25年(1950)/28歳

**色**紙をちぎって貼り重ねる手法で、美しい風物を描いた山下清(1922～71)。波乱に満ちたその生涯は、テレビや映画でたびたび紹介されてきました。「裸の大将」や「放浪の画家」の姿を思い起こすでしょう。しかし実際は、旅先で絵を描くことはほとんどありませんでした。

並はずれた記憶力の持ち主だった清は、旅から戻って脳裏に焼き付いた風物を再現しました。彼のフィルターを通して新たに生み出された風景は、実際より色鮮やかでどこか懐かしい情景となり、人々の心をとらえました。

本展では、漆黒の空を彩る鮮やかな花火と水面に揺れる光の陰影が印象的な代表作「長岡の花火」や、独特の表現による油彩作品に加え、これまで紹介されてこなかったエピソードや資料を展示し、真実の山下清の世界に迫ります。【会期】10月27日(土)～11月25日(日)

総合博物館 青森県立郷土館だより Vol.38 No.2 通巻141号 2007.8.1

編集・発行 総合博物館 青森県立郷土館

〒030-0802 青森市本町二丁目8-14 TEL (017)777-1585(代)

ホームページ <http://www.pref.aomori.lg.jp/kyodokan/>

